

I 東海市の概要

1	歴 史	-----	12
2	沿革図表	-----	14
3	位置・面積等	-----	14

I 東 海 市 の 概 要

1 歴 史

東海市の歴史は縄文時代にその源を探ることができる。弥生時代になると日々狩猟や漁労の生活をしていた人々が定着して農耕作業をするようになり、これらの定着した住人が本市の先祖と思われる。

当地方で一番古い古墳と言われるカブト山古墳が4世紀ごろに築造され、続いて数多くの古墳が本市に造られた。そしてこれらの古墳の発掘によって当時の豪族の長の実態や、一族の生活の様子をうかがうことができる。

大化の改新を経て、律令時代に入ると、豪族の手によっておさえられていた私有地が中央政府の支配下に統一され、公地公民の制度が地方にまで確立した。

そして班田制の施行に伴う条里制の実施が行われたが、本市においてはその実態は詳らかでない。

仏教文化が栄えはじめた飛鳥から奈良、平安時代にかけて本市においても寺院の建立が行われ、木田（今の大田町）に雨尾山観福寺が、大里（今の大田町）に待暁山弥勒寺が七堂伽藍の美を競って建てられた。

またこのころ、現在の養父町から大田町、名和町の海岸一帯に塩作りが盛んに行われ、幾多の製塩遺跡が発掘されている。

本市は古代から東西交通上の要路にあたり多くの旅人が、京都、大阪方面から海路本市へわたり、陸路関東へ向かっていった。平安のはじめ伊勢物語の主人公、在五中将在原業平朝臣が伊勢より大里の浦を経て富田（今の富木島町）の地に住んだという伝説があり、現在も業平の墓と伝えられる五輪の塔が当地に残っている。

平安後期には融通念仏宗の開祖良忍上人が富田に生まれた。幼年より神童と評判され、12歳で出家して比叡山に入り、その後苦しみと悩みに耐えた修行を重ね、阿弥陀仏の靈告を感得して自分と他人とがとけあい結びつく、いわゆる融通念仏宗を開き、諸国を教化してその普及に努めた。61歳をもって大原の来

迎院で亡くなり、朝廷より聖応大師の諡号を賜った。

室町の中ごろ、荒尾谷（平島、加家、渡内、寺中、清水、木庭、富田の旧 7 か村）に荒尾氏があつて、その勢力を近隣にふるっていた。荒尾氏は在原業平の子孫といわれ、花園天皇の康正 2 年（1456）には内裏造営の資として段銭 4 貫文を献じている。弘治 2 年（1556）荒尾美作守空善が木田城に移った。その後、平島城に生まれた池田輝政はこの荒尾氏の養子となり、荒尾古新丸と名乗って木田城に住した。輝政は父や兄と共に信長そして秀吉に従い、関ヶ原の合戦には家康方につき、その功によって慶長 5 年（1600）姫路城主となった。

近世に入って尾張 2 代藩主徳川光友が寛文 6 年（1666）横須賀御殿を本市（今の高横須賀町）に造営し、町はがぜん隆盛を極めた。この御殿は光友死後まもなく取り壊しの運命となったが、その後天明 3 年に御殿跡に横須賀代官所が設置され、北は名和村（今の名和町）から南は大泊村（今の南知多町）までの 75 か村を統轄するに至り、再び知多西海岸の首都として繁栄を持続した。

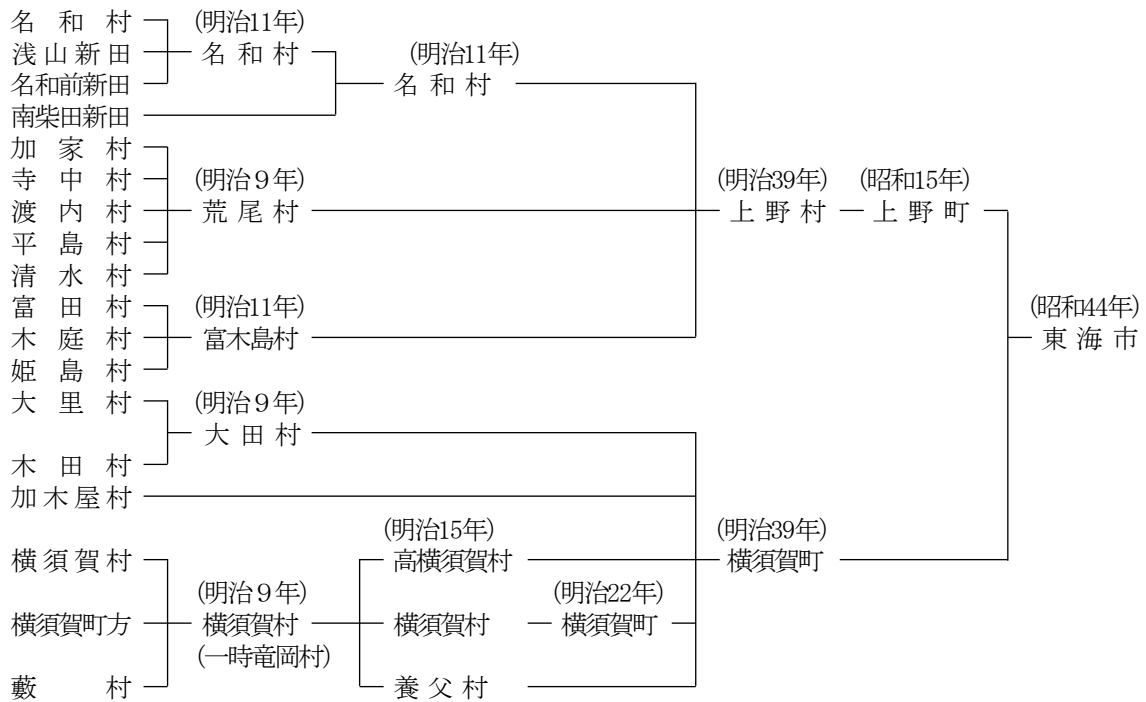
享保 13 年（1728）に折衷学派の大儒学者細井平洲が荒尾町平島の地に呱呱の声をあげた。幼少から各地で学業を積み、江戸に出て嚶鳴館という塾を開いた。各藩から師として招かれ、中でも米沢藩での藩復興の功績は顕著であった。

尾張の藩校明倫堂の初代督学として藩学を興隆させるとともに庶民の教育にも大きく貢献し 74 歳にて没した。東京浅草の天嶽院に葬られた。

かくて明治の代となる。明治 39 年 5 月に旧 17 か村がそれぞれ合併して横須賀町と上野村（昭和 15 年 2 月に上野町）となり、大正を経て昭和 44 年に東海市となった。

（東海市史・資料編第 6 巻序説参考）

2 沿革図表



(注) 東海市史資料篇第6巻から引用、荒尾村、富木島村の成立年については、東海市史資料篇第1巻の記述に従った。

3 位置・面積等

① 位置

東 経 136 度 54 分 09 秒 北 緯 35 度 01 分 23 秒

② 面積

43.42 km² 広ぼう 東西延長 8.06 km 南北延長 10.97 km

③ 市制施行年月日

昭和44年4月1日 (旧上野町、横須賀町合併)

④ 世帯と人口 (令和8年5月1日現在)

世 帯 53,241世帯

人 口 総 数 113,244人

男 58,876人

女 54,368人

人口密度 2,608人/km²

⑤ 都市形態

臨海工業都市